HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	第一次世界大戦下における社会主義運動(1)：ツィンメルヴァルト運動を中心に
Author(s)	成田, 博之
Citation	北大法学論集, 21(4), 141-169
Issue Date	1971-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/27910
Type	bulletin (article)
Note	資料
File Information	21(4)_P141-169.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

資料

第一次世界大戦下における社会主義運動 (1)

――ツィンメルヴァルト運動を中心に――

成田博之

目次

はじめに
第一章 開かれなかった第二インタナショナル第一〇回大会（ウィーン）
(1) サライェヴォ事件
(2) 最後のB・S・I総会
第二章 開戦直前の社会主義者たち
(1) ドイツとフランスの社会主義政党（以上本号）
第三章 いくつかの国際会議
第四章 ツィンメルヴァルト会議
第五章 ツィンメルヴァルト運動の拡大
第六章 ツィンメルヴァルト運動の消滅

はじめに

第一次世界大戦はそれまでの戦争の性格を大きくかえるものであった。それが「総力戦」あるいは「全体戦争」と称される性格をもっていたからである。戦争が長期化するにつれて、最初予定していた軍需物資ではおいつかなくなったから、各国政府はその生産のために国家経済を再編成する必要にせまられた。したがって、非戦闘員も否応なく戦時体制に組みこまれることになった。また武器の改良によって戦闘員の損失も膨大になり、そのたえまない補充が要求された。このことは、銃後での生産や遺された者の生活保障の問題をひきおこした。イギリスの海上封鎖、ドイツ潜水艦の無差別攻撃によって非戦闘員の生活は圧迫された。のみならず、地上における市民にたいする直接攻撃さえもおこなわれた。戦争に参加した国のすべての市民は戦争政策の枠組にはめこまれ、しかも戦争を遂行するためにはこのことが不可欠なのであった。

開戦当時の興奮が一応おさまり、長期化した戦争が市民生活に窮乏を強いる度合がつよまるにつれて、何のための戦争なのか、という疑問が自然発生的に生じてきた。それは、市民の中から生れただけでなく前線の兵士の間からも出てきたのであった。そして、戦争に対する認識および対応の仕方のちがいを反映して、さまざまな形で反対運動が展開されてゆく。

この運動の指導者であった当時の社会主義者の間にもいくつかの流れができた。彼らは、あくまでも戦争を遂行しようと主張するグループ、とにかく戦闘行為をやめ、話しあいによって平和をもたらそうとするグループ、それから、戦時下においても社会主義建設の可能性を追求し、戦争の内戦への転化という方法をとおしてこれに到達しようとするグループなどにわかれた。

本稿でとりあげたツィンメルヴァルト運動とは、後者のふたつのグループに属する社会主義者たちがこの時期にすすめた反戦運動である。彼らは一九一五年にスイスのベルン近郊の寒村ツィンメルヴァルトで会議をもち、戦争反対の声を挙げ各国にそれをひろめた。この運動は戦争に参加しなかったスイスの社会主義者が中心になって展開され、参加者が少数にすぎず、しかも、彼らが必ずしも大衆的組織を基盤としていなかったためにこれまであまり重視されていなかった。たとえ言及されても、それは、言葉どおりたんに触れられるにすぎなかったり、または、もっぱらイデオロギー上の対立という角度からのみ検討されたり、あるいは、一九一九年に創設されたコミンテルンの思想的・政治的前提として

片付けられていたにすぎなかった。

ツィンメルヴァルト運動についてのこのような位置づけを筆者は必ずしも全面的に否定するものではないが、しかし、本稿では、各国の政治状況との関連からこの運動全体を改めてとらえなおしてみたいと考える。また第二インタナショナルに蝟集しこれを指導した社会主義者たちとは異ったタイプの社会主義者の層がこの運動のなかから生れてきたのではないかと思われるからである。

この運動にはかなり多くのロシア人亡命革命家が参加した。彼らはロシアで一九一七年三月に革命がおこると直ちに帰国してこれに加わり指導をおこなうが、その基盤はまさにツィンメルヴァルト運動のなかでつちかわれたのではないかと考えられる。このことは、ロシア革命の指導者の中心的人物のひとりであるレーニンがツィンメルヴァルト運動で無視し得ない役割を果していることからも明らかであろう。

第一章　開かれなかった第二インタナショナル第一〇回大会(ウィーン)

(1)　サライェヴォ事件

一九一四年六月二八日、オーストリア領ボスニアの都市サライエヴォでオーストリア皇太子夫妻が一人のセルビア人によって暗殺された。第一次世界大戦の発火点となったこの事件も、すぐには社会主義指導者の注意をひかなかった。[1] 彼らはここ数年来バルカン半島で多くの事件がおきたことを知っていたために、この出来事もそのうちのひとつのエピソードとしかみなかったのであった。[2] 暗殺もめずらしいことではなかったのである。

ドイツでは、事件の翌日S・P・D幹部会が、この事件が以後如何に発展するかを検討するために会議をもった。[3] しかし、そこでは暗殺事件が国際政治にどのような影響を及ぼすかということよりも間近にせまっているウィーンの国際社会主義者大会（第二インタナショナル第一〇会大会）が予定どおり開催できるかどうかということに関心があつまっていた。S・P・Dの党首、ハーゼの心配は、主として、この暗殺が民族主義的動機からなされたことがはっきりした場合には、オーストリア政府側の動向によっては大会を延期しなければならなくなるかもしれないということ、および、セルビア代表ばかりでなく他のバルカン諸国の代表も不愉快な目に合うかもしれないということなのであった。彼はまた、オーストリア国内の雰囲気次第では、その首府でもたれるこの大会で、最も重要な議題（帝国主義と戦争に直面する社会主義者の立場）

を率直に議論できないのではないだろうかという不安もおぼえていた。[4] それゆえ、オーストリア社会民主党から、大会開催につき支障がない旨の保障が得られなければ場所を再検討しなければならないと主張したのであった。ハーゼとならんでS・P・D幹部会の議長であったF・エーベルトの考え方は全く対照的であった。彼は、この事件を契機として国際紛争が生じたり、オーストリア＝セルビア間により緊迫した状況が発生したりすることはあり得ないしオーストリア政府が大会を妨害したりする筈もない、と極めて楽観的な見通しをもっていた。[5] 結局、この幹部会では、オーストリア代表に事態の説明を求め、その上で各国の代表が日程変更の必要性の有無について話し合うために国際社会主義ビューロー[6]（以下B・S・Iと略称する）総会を開くことを要求するというシャイデマン提案が採択された。[7] ユイスマンス[8]からこのドイツの要求を伝えられたF・アドラーは「S・P・Dの懸念は全く根拠がない」と答えて彼を安心させた。[9]

オーストリア社会民主党は大会準備に追われていた。今度の大会には前回よりもはるかに多数の代議員の参加が見込まれていた。[10]

一九一四年夏のヨーロッパの雰囲気は一応平穏であった。国内政治も外交問題もそろって休暇に入っており、インタナショナル指導者たちもそれぞれ夏休みをとっていた。カウツキーはローマへ、ベルンシュタインはスイスの田舎へ、S・P・Dのエーベルトはルューゲン島へ、シャイデマンはアルプスへ、V・アドラーはバード・ナウハイムへ、それぞれ出かけていた。レーニンも妻のクループスカヤの健康がすぐれなかったために静養させようとカルパチヤに行っていた。[11]

B・S・I内部でも、ヨーロッパの社会主義政党内部でも、国際政治状況についてオーストリアとセルビアの紛争に注意をはらう者はいなかったようである。[12] サライェヴォ暗殺事件発生からオーストリアの最後通牒が発せられた七月二三日までのほぼ三週間、社会主義諸政党はこの事件について目立った反応も示さず集会も組織しなかった。[13] 七月一四―一六日に開かれたフランス社会党臨時大会においても、戦争を阻止する手段としてゼネストが有効か否かがもっぱら論じられたのであった。[14]

七月の第三週までB・S・Iは大会準備に没頭していた。七月二一日になって、はじめて、F・アドラーがウィーン大会開催の見通しについて疑惑を抱きはじめた。この日、オーストリア政府の検閲によって『アルバイター・ツァイトゥンク』（オーストリア社会民主党機関紙）紙が掲載したフランス社会党大会報告が削除さ

れたからである。しかし、彼が政治状況について相談しようにも、党幹部のほとんどの者は前述のようにウィーンをあけていた。けれども彼は七月二三日にどうやら会合を開くことに成功し、そこで大会の場所を他の国に変更することを提案した。この会合の直後にオーストリアのセルビアへの最後通牒が発せられたのである。アドラーは自己の発議によるこの会合の結論として〝大会の強行は困難である〟旨が出されたことをB・S・Iに早速報告した。[15] ユイスマンスはこの報告を受けとる前に新聞で最後通牒のことを知り大会をスイスに移す準備にすでにとりかかっていた。[16]

「最後通牒には全く驚きました。ほんとうに予想だにしないことでした。私はといえばフランツ・ヨーゼフ皇帝も、皇太子も平和を維持したがっているとばかり思っていたのです。ところが、一挙に戦争宣言です。最後通牒は、まさに、それ以外のなにものでもないのですから。」[17] V・アドラーへの手紙でカウツキーはこのように述べ、セルビアとの戦争は必至であると判断していた。

七月二四日、ユイスマンスは、B・S・I執行委員会にたいして緊急総会の開催を提案し、これに同意を得た。総会はブルュッセルで二九日に開かれることになり、ユイスマンスは二四日にこの旨を代議員に電報で通知した。

二三日以後、社会主義諸政党の機関紙は、間近に戦争の危機が迫っていること、即座に反対行動に立ちあがるべきことをいっせいに訴えはじめた。二五日には、S・P・D幹部会が次のような声明を出した。

「われわれは大セルビア民族主義者たちの行動をも糾弾するが、またとくにオーストリア・ハンガリー政府の軽はずみな戦争挑発に対して、もっとも鋭い抗議をもって挑戦する。…(ドイツのプロレタリアートはドイツ政府に)平和を維持するためにオーストリア政府に圧力を加えること、そしてもしも恥ずべき戦争を阻止し得なくなった際には、あらゆる好戦的おせっかいをやめるべきことを(要求する。)…ドイツ兵士の一滴の血と雖も、オーストリアの権力者や帝国主義的利潤追求者の肉欲のために流されてはならない。

党同志よ、われわれは諸君が直ちに大規模なデモンストレーションによって階級意識あるプロレタリアートの不動の平和の意志を表明することを求める。」[18]

この声明で特徴的なことは「ただ抽象的な平和の要求であって、具体的な集中的要求は出されていなかった。」[19] 点もさることながら、何よりもまず、オーストリア政府の行動を非常に激しい調子

で非難しながら、自国(ドイツ)政府の方針自体について全くふれていない点であろう。ドイツ政府が、陰然とオーストリア政府を後押ししていることが見落されている点は極めて興味深い。同日付の『フォルヴェルツ』紙には、ドイツの排外主義的新聞が盛んにオーストリア政府の好戦心を煽りたてており、しかも、「疑いもなくヴェートマン・ホルヴェークもベルヒトールトに対して背面援護を約束した」と指摘されているのである。[20]

オーストリア社会民主党もやはり七月二四日に声明を発表し、軍事的紛争がオーストリア国民に与えるであろう結果について政府を非難した。[21]だが、ドイツの党と同じように、オーストリアの党も紛争の局地的性格を強調しており、それがヨーロッパ全土にかかわることなど予想もしていなかったのである。

二五日声明の後、『フォルヴェルツ』紙に戦争反対の抗議行動を呼びかける檄が連日のように掲載された。[22]これに応えて二六日から三〇日にかけて、ドイツの多くの大都市工業地区で街頭デモ・抗議集会が行なわれた。[23]

カウツキーはこの状況につい七月二五日V・アドラーにあてて次のように述べている。

「……いまやオーストリアでは、ゼネストをもって戦争反対の抗議行動に立ちあがるべきときだと思われる。しかし、大衆には、そのような抗議の気配は少しも認められない。

このような状況下にあっては、われわれは党の統一を首尾よく保持し得ることをもって成功だとしなければならないであろう。[24]」

フランスの状況はどのようなものであったろうか。この同じ時期、すなわち二五日から二七日にかけて、迫りくる危機にたいする労働者の自覚を呼びかけ、戦争反対の抗議行動をパリでも展開するようにと訴えたのはC・G・T(フランス労働総同盟)だけであった。[25]オーストリアがセルビアに宣戦を布告する前日、七月二七日のC・G・T機関紙『バタイユ・サンディカリスト』には、「全力をあげて戦争阻止！今晩、街頭へ！」「どんな戦争宣言にも労働者は革命的ゼネストでこたえなければならない!!。[26]」というアピールが載っている。フランス社会主義者達の中ではジョレスだけが、二三日の最後通牒の危険性を見抜いていた。彼は精力的に『ユマニテ』紙でオーストリア・セルビアの紛争について論評を加え、[27]何とか外交的に解決されることをのぞみつづけていた。それゆえ、イギリスが二六日に、フランス、イギリス、ドイツ、イタリアの四国会談を提唱したことに期待をかけ、「オーストリアが犯罪的過誤をおしすすめ、セルビアの譲歩に戦争で答えるに至るとして

も、ヨーロッパ的調停は、諸国民がこの調停提議に光明・彼等の無数の平和への意志にたいする支柱・輝やかしい中心を見出すかぎり、交戦諸国が考慮せざるを得ぬ力として留まるであろう。」[28]と記している。

ドイツがこのイギリス提案を拒否した二七日になってフランス社会党指導者は事態の重要性に気づきその検討をはじめた。二七日にはフランス社会党常任執行委員会が「国際状勢、B・S・I臨時総会」という議題で開かれた。席上、ヴァイヤンが戦争反対の共同行動をおこすためC・G・Tにたいする正式な話し合いを申し入れるよう要求した。しかし多数意見は近く開かれるB・S・I総会の決定を待つべきであるということに落着いた。この委員会できまったことは、社会党の議員が議会の開催を要求すること、各地方で抗議集会を開くこと、党として声明を発表することだけであった。[29] そこでジョレス等が声明を作成することになり、翌日の『ユマニテ』紙にこれが掲載された。

「社会制度の根本的無政府性、資本家の競争、植民地的貪欲、帝国主義の策略と暴力、一方の掠奪政策、他方の高慢と威信の政策、此等が十数年来全ヨーロッパに永久的緊張、戦争の恒久的な、増大する危険を創出した……（今回の戦争の危険の増大は、もっぱらオーストリア側にある。）……フランスの社会主義者、労働者は、フランス政府が現在の危機において、衝突を遠ざけ、または弱めるよう極めて誠実な配慮を有することを知っている。彼らが政府に要求することは、オーストリアの諸要求の大部分を受け入れたセルビアの熱意により、さらに容易となった和解と調停の手続きを承諾させるよう努力することであり、また政府が盟邦ロシアに働きかけ、ロシアがスラヴ的利益防衛に攻撃的行動の口実を探すに至らぬようにすることである。彼らの努力は、かくて、ドイツに盟邦オーストリア抑制の行為を果すよう要求しつつあるドイツ社会主義者の努力に対応する。インタナショナルが、ブルュッセルに集まるのは、一層の力をかたむけて、一致して、ヨーロッパ・プロレタリアートの共同の平和への意思を確認し、力強い共同行動を協議するためである。[30]」

この声明発表の翌日開かれたB・S・I総会は、はたして「共同行動」のプログラムを作成できたであろうか。

（1） この時代を生きたインタナショナルについての歴史家であるJ・ブラウンタールは「社会主義政党には、（また全世界にとってもそうであったが）、ドイツが、オーストリア・セルビア紛争の故にロシア、イギリス、フランスと戦争状

態に入りかねない危険を冒すなどとは不可解なことと思われた。彼らは、ヨーロッパ戦争を思いもしなければ、まして、サライェヴォ事件が戦争になるなどとはなおさら考えてもみなかった。」と言っている。J.Braunthal, History of the International, vol. 1, 1961, pp. 347-8

(2) James Joll, The Second International, 1968, p. 158

(3) G. Haupt, Le congré manqué-l'internationale à la veille de la première guerre mondiale, 1965, p. 271

オープトのこの著作は、二部から成っており、第一部は、ウィーン大会に至るまでの、国際社会主義運動の推移の過程を、B・S・Iの資料を駆使して分析したものであり（pp. 20-117)、第二部は、大会が中止になったために公表されなかった報告書や、B・S・Iブルュッセル総会の議事録（要約）などこれまで公表されなかった資料を収録したもの（pp.120-283)である。本稿は、とりわけ、この資料に負うところが多い。

(4) ウィーン大会ではオランダのフリーギン(Vliegen 1862-1942)が「帝国主義と国際仲裁裁判所」という報告をすることになっており、ハーゼはこのテーマにつき基調報告をする予定であった。

(5) G. Haupt, ibid., p. 272

(6) 第二インタナショナルの常設機関。一九〇〇年に設置された。その性格は曖昧であったが、加盟各政党のトップリーダーが参加しており、各国の社会主義政党間の連絡および運動の指導を行なっていた。

(7) G. Haupt, ibid., p.273

(8) B・S・I書記。それまでの彼の活動については、成田「レーニンと第二インタナショナル」北法二一巻二号四一頁以下参照。

(9) G. Haupt, ibid., p.102

(10) 一九一〇年コペンハーゲンで行なわれた第九回大会には、八八四名の代議員が出席した。История Второго Интернационала, 1966, стр. 896.

(11) J. Joll, ibid., p. 159

(12) C. Grünberg, Die Internationale und der Weltkrieg, 1916, S. 132-133.

本書は、ヨーロッパの社会主義諸政党が、第一次世界大戦直前および直後に発表した決議、声明等を集めた資料集である。

(13) もっとも、『フォルヴェルツ』紙(S・P・D機関紙)は七月一日にこの事件を論評し、フランス・イギリス・ドイツが協力して南スラヴ問題を解決するよう訴えていた。

社会主義者たちは何故この事件にさほど注目しなかったのであろうか。ひとつには、アガディール事件や二度のバルカン戦争が、ともかく局地的なものとして処理されたことがあげられよう。このときには、社会主義者達は各地で

集会やデモを行ない抗議の声をあげた。しかし、これらの紛争が局地化されたのは、このような大衆の抗議の効果としてではなく、主として列強の支配層が大規模な戦争を望まなかったからにすぎなかった。にもかかわらず、社会主義者たちは、今度も、各国の大衆の強い反対を無視して、あえて、戦争にふみきる政府はあるまい、と考えていたのであった。M. Fainsod, International Socialism and the World War, 1935, p.19

(14) フランスの党大会が、このいわゆる「ゼネスト論争」に終始したのは一九一〇年コペンハーゲン大会で、ケア・ハーディ＝ヴァイヤンが大会決議案にたいして次のような修正案を提出したからである。

「戦争を予防し、阻止するために適用されるすべての手段のうち、大会が特に効果的と考えるのは戦争に道具(武器・弾薬・運輸など)を供給する産業を中心とする労働者のゼネストと、最も積極的な形での民衆の煽動および民衆行動である。」(この部分は西川正雄氏の訳文による。西川「第一次世界大戦前夜の社会主義者たち」岩波講座世界歴史23 二七四頁)

この問題の審議は、次回のウィーン大会に持ち越されることになり、そこで、フランスの党は、正式の案を作成するためにこれをとりあげたのであった。この党大会において、同党内のふたつの大きな流派、すなわち、ジョレス派とゲード派は協力してケア・ハーディ＝ヴァイヤン案をしりぞけた。が、これにかわる草案を作成する段になってこの両派が対立した。ゲード派は、ゼネストにふれていないシュトゥットガルト・コペンハーゲン決議に固執し、ゼネストは「最もよく組織され、インタナショナルに最も忠実なプロレタリアートのいる国を、社会主義の一番後れた規律の最もない国の犠牲にする」(西川訳、前掲論文二八四頁)ものであるとして譲らなかった。これにたいして、ジョレス案は、ケア・ハーディ＝ヴァイヤン案に表面上きわめて類似していたけれども、前提として厳しい条件を付している点で根本的に出発点を異にするものであった。それは次のようなものである。

「戦争を予防・阻止し、各国政府を国際仲裁裁判所に赴かしめるために適用されるすべての手段のうち、大会が特に効果的と考えるのは、利害関係のある国々で、国際的に、かつ、同時に組織されるゼネストと、最も積極的な形での大衆煽動と大衆行動である。」C. Grünberg, a. a. O. S.132-134.

このように、ジョレス案では「利害関係ある国々で、国際的に、かつ、同時に組織されるゼネスト」のみが「効果的」(傍点、筆者)であるとされているのであり、この点こそがケア・ハーディ＝ヴァイヤン案との差異として重視されるべきだと思われる。なぜならば、ジョレス案の厳しい前提

条件の充足が、きわめて困難であることは言うを俟たず、したがって、この形態におけるゼネストはおよそ不可能にちかいと考えられるからである。西川氏は『修正案』(ケア・ハーディ＝ヴァイヤン案＝筆者)を支持するジョレスは、…」(西川、前掲論文二八四頁)とされているが、この点につき筆者は見解を異にするものである。なお、これにつき、A. Kriegel, Patrie ou Revolution : Le mouvement ouvrier français devant la guerre (jouillet-août 1914.) 《Revue d' histoire economique et social》 1965, vol. 43, No.3 参照。結局ジョレス案がとおった。

(15) Memorandum du secrétariat du parti social-démocrate allemand d'autriche du 23 juillet 1914 au B.S.I.
G. Haupt, op. cit., pp. 274-276 に収録されている。
オーストリア政府によって削除されたのは、フランスの党大会の報告のうち、前掲(注(14))の戦争阻止のためのゼネストを訴えている箇所であった。

(16) G. Haupt, op. cit., p. 104

(17) Victor Adler, Briefwechsel mit August Bebel und Karl Kautsky, 1954, S.596

(18) 村瀬興雄「ドイツ現代史」一九四五年初版一九七―一九八頁に拠った。原文は Grünberg, a.a.O., S.51 所収のものである。なお、他にもこの七月二五日号は収録されている。たとえば、A.W. Humphrey, International Socialism and the War, 1915, pp. 34-35. このハンフリーの著書は、一八四〇年代から一九一四年一〇月までの社会主義運動の発展を概説したものである。戦争の前後の時期におけるヨーロッパ諸国の社会主義政党の見解を、主として、イギリスの新聞から抜萃しているもので、研究書というよりは、資料集として価値がある。

(19) 村瀬、前掲書一九七頁。

(20) Grünberg, a. a. O., S. 50.

(21) Arbeiter-Zeitung, 一九一四年七月二五日, Grünberg, a.a.O., S.89-91.

(22) Grünberg, a. a. O., S. 52-58.

(23) 主な都市は次のとおりである。バルメン、ブレスラウ、ブラウンシュヴァイク、ケムニッツ、ダンツィッヒ、デュッセルドルフ、ドゥイスブルク、エッセン、フランクフルト・アム・マイン、フライブルク、ゴータ、ハーレ、ハンブルク、ハノーヴァー、イェナ、キール、ケルン、ケーニッヒスベルク、マンハイム、ミュンヘン、ニュールンベルク、シュテッチン、シュトゥットガルト、カンシュタット。
Grünberg, a. a. O., S.58

(24) V. Adler, Briefwechsel, S. 596

(25) Grünberg, a. a. O., S. 134. C・G・Tの声明が最初であった。

(26) La Bataille syndicaliste. 一九一四年七月二七日 Grünberg,

a. a. O., S.134-46

(27) 平瀬徹也「暗殺直前のジョレス—その国際主義の動揺の有無をめぐって—」史学雑誌、第七一編第十二号、二五—二七頁。

(28) 平瀬、前掲論文二八頁。

(29) A. Kriegel, Aux origines du communisme français, 1914-1920, Tome 1, 1964, p.54

(30) 平瀬、前掲論文三〇頁。なお、原文は L'Humanité 一九一四年七月二八日紙上に発表されたものであり、これは、Grünberg, a. a. O., S.197 に収録されている。

(2) 最後のB・S・I総会

B・S・I緊急総会は、一九一四年七月二九日にブルュッセルの〝人民の家〟で開催された。前日にオーストリアがセルビアに宣戦を布告したばかりであり、国際的な政治状況は時々刻々に変化しつつあった。

総会には、ヨーロッパのほとんどすべての国から著名な社会主義指導者三三名がそれぞれの党の代表として出席した。だが、二つの党の代表は欠席していた。セルビア代表とロシアのボリシェヴィキ代表リトヴィフである。(1)

ここで、この会議の模様を忠実に追ってみたい。

会議はヴァンデルヴェルデの司会で始った。議題は(1)最後通牒をめぐる国際状況について(2)ウィーン大会についての二つが予定されていた。まず各国の状況をそれぞれの代表が報告した。

紛争の一方の当事国であるオーストリアの社会民主党の領袖V・アドラーがまず発言した。

「このいわゆる最後通牒は全世界にとってと同様、われわれにとっても大きな驚きであった。われわれはこうした外交のやり方に警告を与えてきたとはいえ、戦争を拱手傍観しているしかなかった。たとえセルビアがこの通牒をのんだとしても戦争は避けられまい。

われわれの党は活動する力をもっていない。こう言わなければ、われわれはビューローにたいして嘘をつくことになろう。」

オーストリア人は、当然のことながらセルビアに対して反感をもって居り、この問題にけりをつけたがっていた。アドラーの個人的見解によれば戦争は全世界にひろがる規模にはならないのであった。彼はつづけて言う。

「われわれはこの危機を避け得ない。デモンストレーションは、いまや、わが国内では不可能になっている。反戦行動は投獄や生命の危険を招くことなのだ。オーストリアの党は、これまでにも

このような危険に耐えて活動した経験をもっている。しかし現状では、党組織や党機構がすべて潰滅するおそれさえないとはいえない。わが党の三〇年におよぶ活動の実績を何の政治的成果もないままに無に帰せしめる賭をすることになるのだ。……スト、デモ等々の反戦活動は幻想にすぎない。問題はあまりにも重大すぎる。われわれは戦争が他に拡大しないことを願うだけである。……われわれはウィーン大会を熱心に準備し待ってもいたのであるが、もはやこれを返上するよりほかしようがないことになった。われわれは自分たちの党をまもりたい。B・S・Iとわが党の出来ることは(戦争)犯罪人を非難し、紛争の局地化に努めることだけである。われわれは、何よりも戦争を避けたい。しかし、いま、それが可能だと信ずることは奇蹟がおこるのを信ずることにひとしいであろう。(2)」

ベーベル亡き後の西欧社会主義運動の長老である、V・アドラーが、戦争を目前にして、かくもペシミスティックに党の無力を語ることしかできないということは、参加者を驚かせた。

アドラーはさらに、「B・S・Iの決定は、加盟政党のすべてにたいして拘束力をもつものではあるが、現状にそぐわない決定を下さぬように希望する。(3)」

とのべ、オーストリアの党にとって都合の悪い決定は履行することは出来ない、と予防線をはっていたのである。

つぎにS・P・D議長ハーゼが発言した。

「プロレタリアートは、この危機にあって何をなしたらよいのかその指針を求めているのだ。ブルジョア新聞を真にうければ、プロレタリアートは社会排外主義的傾向を有している、ということになる。しかし、ベルリンから私あてに届けられた電報は全く逆のことを語っている。この電報によれば、先日、ベルリンでは何万という労働者が二七の会場にあふれんばかりに集合して戦争反対・平和擁護を決議しているのだ。」

ハーゼはこの会議を切りあげて、一刻も早く帰国したがっていた。「外交は急速に進展している。われわれは決して遅れてはならない!!(4)」と彼は声高に述べた。

ヴァンデルヴェルデは「各国のリーダーがいまいっせいに帰国してしまえば、今夜開かれる予定の国際集会で彼らの演説をきこうと参集してくる聴衆が、さぞがっかりするだろう」、とおだやかにハーゼをなだめたが、ヴァイヤンも「折角総会を開いたのに何も決定しないうちに席を立つのか」とハーゼを制止した。

ポーランド代表ローザ・ルクセンブルクも「能率よく討論をす

すめよう。まだ声明も作ってはいないし、大会についても何もきまっていないではないか」[5]と議事進行を促した。

午後三時から再開された会議で、早速、ハーゼが、大会を遅くとも来週中にパリで開くことを提案し、大会の意義について次のように述べた。

「この大会は世界中の労働者、世界の政治状況に何らかの影響を与え得るであろう。肝心なことは、社会民主主義者が国際政治のうえで無視し得ない存在であることを世界中に認識させることなのだ。われわれは自分たちがもっている影響力を行使しよう。パリで、ロシア人、オーストリア人、フランス人、ドイツ人、イタリア人等が一堂に会して抗議の声を挙げれば、われわれは、自己の責務を果したという満足感をもてるであろう。われわれが成功をおさめ得るか否かはわからない。が、われわれは責務は果さねばならない。」[6]

この発言だけを捉えて検討することはあまり意味のないことかもしれない。しかし、次の点は注意されるべきであろう。すなわち、それまで第二インタナショナルは戦争反対声明を出すだけで十分その役割を果していた。状況がさほど危機的でなかったからである。ところが、いよいよ実際にヨーロッパ全体が戦争に直面したこの時期になると、各国の社会主義者を拘束する共通の行動綱領をインタナショナルが出し得ない状況が、そこに加わっている社会主義政党の間に生じたと思われる点である。戦争反対の声を挙げることだけが社会主義者の義務であると規定し、この最低限度の義務を果すために大会を召集することが必要だと述べるだけで、そのあとに当然つづくべき行動の指針に言及しないハーゼ発言は当時のインタナショナルの内部状況を物語っているといえよう。

イタリア代表バラバノフは、大会開催前にB・S・Iが緊急に何等かの決定を行ない、戦争阻止の手段を具体的に示すべきだと主張した。[7]しかし、これに対してジョレスが反対した。

「大会こそが最高決議機関なのであり、B・S・Iはそのお膳立てを整える役割をもつにすぎない。だからB・S・Iが予め何かを決定し、大会にそれを追認せしめることは許されるべきではない。」[8]

ハーゼもこれに同調した。

「(パリ)大会を成功せしめることがB・S・Iの仕事である。たとえば戦時のゼネストのような意見の対立する問題を、いま、ここで討議することは避けなければならない。」[9]

B・S・Iは一九〇四年以降、執行機関として機能していた。[10]と

ころが、まさに緊急に決定を下すべきこの時期に、にわかに、連絡機関に立ちもどったのである。こうして、第二インタナショナルを指導していたヨーロッパ各国の主要な社会主義政党の最高幹部のほとんど全員が総会に参集していたにもかかわらず、ここでは何らの緊急措置も、決定も下されなかったのである。これまでの大会を指導し、大会の決定を左右してきたこれらの指導者たちの意見は、次の大会でもそのまま、とおるであろうことは十分に予想されていた。しかしながら、彼等は決断を避けたのである。

次に問題となったのは次期大会の場所・日時の決定であった。イギリス代表B・グレイシアは場所をパリに変えることには賛成したが、日時の変更（ウィーン大会は八月二三日から開かれる予定であった）には反対した。

「戦争が何らかの緊急行動によって防げるのなら、日程を早めることに異存はない。しかし、当事国の社会主義者は無力な状態にある。われわれは、オーストリアの同志を尊敬している。だが、われわれは彼らに『全財産を投げうっても戦争に反対する』と断言することを期待していたし、そう言ってほしかった。」(11)

アドラーが釈明とも反論ともつかぬ発言をした。

「私はグレーシアに何と答えたらよいかわからない。彼は、大会を二週間ばかり早めることにたいして、代表を送ることが難しいという理由で反対しているが、われわれのおかれている状況は、はるかに、はるかに困難なのだ。」(12)

他のイギリス代表K・ハーディもグレイシアの意見を補足して発言した。

「日程を繰り上げる理由が、戦争反対のデモンストレーションのためだけであるならば何の意味もない。デモンストレーションは、それだけでは何の力にもならないからである。予定されている議題は、アルコール中毒、失業問題など、かなり長期的な性格のものである。戦争はすぐ終るであろう。それ故、当初の議題を変更しないのならば日時を変える必要はない、と考える。」(13)

しかし、票決の結果、次の大会は八月九日からパリで開くことが決定された。

総会の討議は、この大会の議題についての問題に移った。

これについては、さしせまっている戦争の阻止および対処の方法を第一の議題とすることに全員が一致した。だが、誰一人として、パリ大会までの十日間に全面的な戦争がおこるかもしれないことを予想せず、したがって、そうなった場合にインタナショナ

ルはどう行動するのか、各国の社会主義者はどのような態度をとるべきか、を問う者はいなかった。[14]

ハーディが、現実にさしせまっている戦争に反対する行動と、帝国主義に反対する将来の闘いとを混同せず、はっきり区別して議論することを提案した。[15] これにたいしてカウツキーが、次のように述べたのである。

「十日間のうちに世界が平和になるとは思えない。こうした状況の下では、これから繰りかえして幾度も議論することができる帝国主義の問題を論ずるために、われわれはパリに出かけることはできないのだ。いまのところ、われわれは長いこと国をはなれるわけにはいかない。だから、将来おこるかもしれない帝国主義戦争のことは、パリでは論じないことにしようではないか。将来の戦争を避けるために、いまさしせまっている小さな戦争をみのがしかねないから。」[16]

ともかく大会では「戦争とプロレタリアート」を議題としてとりあげることがきめられた。そろそろ会議が終りに近づいた頃、ロシアが総動員令を出したらしいという電報が届けられ、これについて、また話し合いがつづいた。

メンシェヴィキ代表のアクセリロードが、現在、ロシアでは革命的状況が進行しており、戦争になれば一層革命化がすすむであろうと述べ、ロシアのプロレタリアートは党よりも革命的になっている、と報告した。[18]

次にハーゼが立ち、アドラー報告をとりあげてオーストリアの党の傍観者的な態度をあらためて批判した。そして、プロレタリアートのデモンストレーションは政府の好戦的態度を強化せしめるとは考えられず、むしろ政府にたいする制御的な役割を果すことになるであろうと述べ、つづいてドイツ国内の実情をうちあけた。

「ドイツ政府は、平和を望んではいるが、ロシアがもしも攻撃してくればオーストリアを援護する側にまわるであろう。……そうなればドイツ社会民主党は、これを利用して一層強力に反戦運動をすすめることになる。……しかし、もしもドイツが戦争に入りこむことになれば、われわれにはそのことまでを阻止する力はない。ただ、いずれにせよわが党は自己の義務だけは果すであろう。」[19]

これにジョレスがこたえた。

「フランスはこれまでもオーストリアの行動を非難してきたし、ドイツ政府が、はじめからオーストリア政府と意を通じてこれを

背後から支援してきたことも知っている。しかし、フランス政府は、平和を望んでおり、ロシアが介入して事を大きくしないことを望んでいる。われわれの主張は、フランス政府が他のいずれかの国家との間で結んだ協定にわれわれの党が拘束されたり、それによる強制をうけたりせず、プロレタリアートの連帯の上にたった活動を独自に展開することこそ重要だという点にむけられている。われわれはドイツの同志が平和擁護を表明したことを歓迎する。われわれがロシアに従わないかぎり、ドイツは、われわれを攻撃しないであろう。われわれには戦争に参加する意思はない。いまここでドイツの同志にたいしてこの点を明らかにしたいと考えるがこれを信じてほしい。[20]」

このように、ドイツおよびフランスの社会主義者は、自己の行動の帰趨をもっぱらロシアの動向にかからしめることで一致したのである。ロシアがドイツを攻撃し、ドイツがフランスを攻撃することになった場合に、それぞれの国の社会主義者はいったいどうすべきなのか、ロシア政府の態度如何にかかわりなく、両国の社会主義者は、自国政府が戦争をはじめたときにどのような活動をすべきなのか、という問題は、したがって、論議の外におかれることとなった。この両国ばかりでなく、他のヨーロッパ諸国の社会主義者も、それぞれ、協商国と同盟国のブロックにくみこまれる形となってゆくのであるが、そのような傾向の萌芽が、このときの議論のありかたにすでに見られると言ってよい。

第一日目の会議は八時に終了した。その後、シルク・ロワイヤルで戦争反対の国際集会が催され、B・S・Iから、ヴァンデルヴェルデ、ハーゼ、モルガリ、ハーディ、ルバノヴィッチ、トルルストラ、および、ジョレスが超満員の聴衆を前に熱弁をふるった。[21] V・アドラーは、この集会に出かけなかった。

まず、ハーゼが演説した。

「戦争の全責任は、オーストリアにある。……オーストリア政府は、ドイツ政府をあてにしているようである。だが、ドイツ・プロレタリアートは、この秘密協定には全くかかわりあいがないことをここに宣言する。われわれは、たとえロシアが干渉してきても、ドイツは介入すべきでないことを政府に直言するであろう。ドイツ・ブルジョアジーは、オーストリアがセルビアを攻撃したが故にすぐにも支援すべきだと考えている。そして、何ら論理的につながらないにもかかわらず、鉄面皮なフランス・ブルジョアジーも、ドイツを攻めなければなるまいと考えているらしい。フランス・プロレタリアートは、このことについて、われわれと同

じ意見をもっている。」[22]

最も熱狂的な聴衆の拍手で迎えられたのはジョレスであった。彼は、その生涯における最後の演説をはじめた。冒頭に彼は、オーストリア・ハンガリーの最後通牒とそれに支持を与えているドイツ政府を激しく糾弾した。そしてつづけた。

「われわれフランス社会主義者の義務は単純明快である。われわれは政府に平和の政策を課する必要はない。わが政府は、それを実践している。執拗な、たえまのない独仏和解の主張によりショービニストたちの憎悪を一身にうけることを決して恐れなかった私には語る資格があるのだが、現在、フランス政府は、平和を欲しており、平和の維持につとめている。

フランス政府は、和解のイニシアチィブを執った、かの賛嘆すべきイギリス政府の、最良の平和の同盟国である。フランスはロシアに自重と忍耐の助言を与えつづけている。だから、われわれの義務は、わが政府が力強くロシアに自重を要望するよう援助することなのである。だが、不幸にしてロシアがそれを無視するときには、われわれは次のように言わねばならない。『秘密条約などは知らない。われわれは唯一の条約、われわれを人類に結びつけている唯一の条約しか知らない！。』と。[23]」

聴衆は、熱烈な喝采を惜しげもなく浴びせた。ジョレスの演説にせよ、ハーゼのそれにせよ、共通しているのは、自国の政府に全幅の信頼をおいている点であった。

演説会の後、興奮さめやらぬ聴衆は、会場からただちにデモに移り、口々に「戦争反対」「平和万歳！」「国際社会主義万歳！」を叫んでねり歩いた。

翌三〇日の総会は、短時間で終了した。開会早々、グレイシアが、ハーディは昨日の議論にがっかりして欠席する、ということを告げた。このことについて彼は次のように述べた。

「昨日の様子では、B・S・Iはフランスやドイツにばかり注意をはらって、イギリスにはさっぱり注目しない。イギリスは、資本主義社会では強国とみなされているのに、B・S・Iはそれにみあった取扱いをしない。イギリス国内では、オーストリア・セルビア戦争が何らかの影響を与えるだろうなどとは考えられていない。イギリスは、バルカン戦争のあとで経済恐慌にみまわれたけれども、いま、さしせまって考えられているこの戦争からはたしかに何の影響もうけないであろう。政府、国民、プロレタリアートなどすべてが戦争に反対し、平和を希求しているからである。[24]」

しかし、この直後にはじまった第一次大戦は、基本的にはドイ

ツとイギリスの斗いの性格をもっていたのである。イギリスは、グレイシァのこの発言のわずか二日後にドイツ軍によるベルギーの中立性侵犯を理由に参戦した。この戦争がイギリスに与えた影響は少なからざるのもがあった。[25]

つづいてハーゼが決議案を提出した。これはつぎのような趣旨のものであった。

「すべての関係諸国のプロレタリアートは、戦争反対のデモンストレーションを継続するばかりでなく、オーストリア・セルビア紛争を解決し、平和を回復するために、……フランス政府をしてロシアに、ドイツ政府をしてオーストリアにそれぞれ圧力をかけさせることにつとめる……(ことを宣言する)。[26]」

ローザ・ルクセンブルクが、ロシアプロレタリアートの革命的行動に熱烈な挨拶を送り、世界戦争の脅威の最も効果的な保障となっているツァーリズム打倒のため英雄的な斗いを続けることをB・S・Iの名で希望する旨をこの決議に付加することを提案し、[27]この提案を含めてハーゼ案が異論なく採択された。[28]

総会決議には、さらに、きたるべきパリ大会では、万国のプロレタリアートの巨大な平和への意思統一がなされるだろう、という期待も盛りこまれており、誰しもが、パリで大会が開かれさえすれば、社会主義者の国際的連帯を土台として平和への展望が開かれることを信じて疑わなかった。[29] ジョレスは、この日、ブルュッセルをはなれる間際に、「われわれは、この後も浮き沈みを経験するであろう。だが、いまのこの危機もきっと解決されるにちがいない。[30]」とヴァンデルヴェルデに語り、一〇日後の再会を約して帰国した。パリに帰った翌日の七月三一日夕方、彼は右翼の凶弾に斃れ、そのまま逝ったのである。

B・S・I総会は、ジョレスが七月二八日に『ユマニテ』紙上に表明した「共同行動」のプログラムを討論もしなければ決定もせずに終ったのであった。のみならず、この総会を最後として、第二インタナショナルは事実上消滅した。

七月三〇日にはロシアで、翌三一日にはオーストリアで総動員令が下された。ドイツ政府は、ロシアに対しては一二時間以内にすべての戦争準備を中止する指令を出すことを、フランスに対しては一八時間以内に、ロシア対ドイツの戦争に対しては中立を保持する声明を出すことを最後通牒として送った。そして、八月一日にドイツとフランスで総動員令が出され、戦争が、第一次世界大戦が、社会主義諸政党の指導者たちの予想もしなかった規模で勃発したのである。

インタナショナルは、もはや、無力であった。この日、B・S・I書記ユイスマンスはパリ大会を無期延期とする、[31]という簡単な回状をインタナショナル加盟の各政党に送付した。

こうして、戦争反対の大デモンストレーションを予定し、戦争に反対する社会主義者の統一プログラムについて協議する筈であったパリ大会は流産した。

(1) 出席者は、以下のとおりである。

イギリス代表＝K・ハーディ、B・グレイシア、D・アーヴィング、ドイツ代表＝H・ハーゼ、K・カウツキー、オーストリア代表＝V・アドラー、F・アドラー、ボヘミア代表＝E・ブリアン、A・ネメッシュ、フランス代表＝J・ジョレス、E・ヴァイヤン、J・ゲード、M・サンバ、J・ロンゲ、イタリア代表＝A・バラバノフ、モルガリ、スペイン代表＝A・F・リバス、コラーレス、ロシア代表＝ルバノヴィッチ、アクセリロード、リトワニア代表＝P・ヴィンター、O・ブラウン、ポーランド代表＝ヴァレツキー、ローザ・ルクセンブルク、デンマーク代表＝スタウニング、オランダ代表＝トルルストラ、ベルギー代表＝ヴァンデルヴェルデ、E・アンセール、L・ベルトランド、ユイスマンス、スイス代表＝K・ムーア、R・グリム

リトヴィノフが欠席した理由は知られていない。当時、ブルュッセルに滞在していたポポフ(ボリシェヴィキ)の回想によると、B・S・I総会に出席した代表の多くは、ボリシェヴィキがどのような態度をとるか、について関心をもっていた、ということである。

「ロシアの状況はどうですか、レーニンはこのこと(七月危機)をどのように考えていますか、とジョレスは私にたずねた。」

ポポフがこの問に答えているときにヴァンデルヴェルデが言った。「あなたはからかわれているのだ。ボリシェヴィキなどという派はゼロに等しい。誰が、ロシアで、彼等に賛成しているのか。」

ポポフは、このように書いているが、真偽のほどは不明である。

И.Попов, В.И.Ленин в Брюсселе-《Воспоминанияо В.И.Ленине》, т.3, м.1960, стр.124-5

(2) G. Haupt, op. cit., pp.252-253

V・アドラーの演説については、「戦争に反対する大衆の立ち上りを期待していたわれわれにとって、それはひどい失望を与えた。(B・S・I)執行委員の誰よりも世界政治に精通し、われわれの誰よりも自国の状況をよく知っていたこの男が、オーストリア大衆にむかって、何らかの立ち上りを指示するような言葉を一言も発しなかった。」と参加者の一人が回想している。A.Balabanoff, My Life as a

Rebel, 1938, 3d.ed., 1968. p. 115

(3) G. Haupt, ibid., p.254

(4) ibid., p.254

(5) ibid., p.255

バラバノフは、「ジャン・ジョレスと、ローザ・ルクセンブルクだけがアドラーと同様に世界戦争の不可避なことと、それのもたらす惨禍を十分みぬいていた代表にみえた。」と言っている。

A. Balabanoff. ibid., p.115

(6) G. Haupt, ibid., p.256

(7) ibid., p.257

なお、バラバノフは、このときの様子を次のように記している。「これまでの国際大会では、戦争を回避するためにまずとるべき手段は、ゼネストであるとみなされてきた。」と彼女が主張すると「アドラーとゲードは私が気がふれた、というような顔つきをした。アドラーは『こうした状況で、ストなどを強行することはユートピア的発想であり、危険このうえもない』と語り、ゲードは『戦時にゼネストをすれば、社会主義運動は、まともに危険にさらされる』と言った。私は『ゼネストのスローガンは、社会主義が非常に強い国でのみその効果を発揮しうる』と反論した。」

A. Balabanoff, ibid., p.116

G・オープトの前掲書所収の議事録は、要約であるためか、バラバノフがゼネストを訴えた発言も、アドラーやゲードの反論も記載されていない。

(8) G. Haupt, op. cit., p.257

(9) ibid., pp.257-258

(10) この点につき、成田、前掲論文参照

(11) G. Haupt, ibid. p.257

(12) ibid., p.258

(13) ibid., p.258

(14) 問うた者が一人いた。カウツキーである。ただし、それは六年後であった。「そこに出席していたわれわれの誰一人として、実際に戦争が勃発したならば何をなすべきか、社会主義政党はどのような態度をとるべきかを尋ねる者がいなかったのは奇妙なことであった。」と彼は書いている。K.Kautsky, Vergangenheit und Zukunft der Internationale, 1920, S.5.

(15) ハーディは、戦争反対の方法としてゼネストをあげた。

J. Braunthal, ibid. vol I, p.352

「彼は、イギリスで、もし戦争が宣言されたならば、労働組合は即刻ゼネストをよびかけるだろうと述べた。」とバラバノフは書いている。A. Balabanoff, ibid., p.116

(16) G. Haupt, ibid., pp.260-261

(17) ibid., p.261

なお、これはオーストリア国境にむけての一部動員であって、総動員令が出されたのは翌日であった。猪木正道、ロシア革命史、昭和四四年、一四二頁。

(18) ロシア代表ルバノヴィッチは、「この電報は、好戦主義者のたくらみのようにみえる。」と発言している。
G. Haupt, ibid., p.261

(19) ibid., pp.262-263

(20) ibid., pp.263-264

(21) ローザ・ルクセンブルクもこの講演会に出かけ、司会者および聴衆から演説を要望されたが、大衆を前に、戦時状況の真実を語って混乱を招くことを恐れて沈黙していた。P・フレーリッヒ、佐藤成彦訳「ローザ・ロクセンブルク」二七八―二八〇頁。なお、J.P. Nettl, Rosa Luxemburg, vol. II, 1966 にも講演したとは述べられていない。

(22) Grünberg, a. a. O., S. 33

(23) 平瀬、前掲論文三一―三二頁。原文はGrünbergの前掲書に収録されている。

(24) G. Haupt, ibid., p.265

(25) 第一次世界大戦がイギリスに及ぼした影響については、A・J・Pテイラー、都築忠七訳「イギリス現代史」I参照。

(26) G. Haupt, ibid., p.266

(27) ローザ・ルクセンブルクの念頭には、このとき、ロシア労働者のゼネストをも含む戦争反対運動があった、と思われる。しかし、彼女は、これ以上に、インタナショナルとしてどう行動すべきか、という問題までは提起していない。

(28) B・S・Iが採択した最終的な決議は、Grünbergの前掲書S.33に収録されている。

(29) 平瀬、前掲論文三三頁。
ジョレスは、パリに帰った三〇日の晩にC・G・Tの訪問をうけている。平瀬論文によれば、その時の模様は次の如くである。
「彼等(C・G・Tの訪問客……引用者注)は、反戦大示威運動の八月二日開催を提案するが、ジョレスは、八月九日即ち第二インター大会がパリで開催され、世界の諸都市で反戦大示威行進がみられる日への延期を要求する。だが、労働者の感情の刻々の変化を知る組合代表は、彼の態度に一驚し『《九日では遅すぎる。我々は流れに抗し得ぬであろう》』と反論するが、ジョレスは頑強に自説に固執する。」
このエピソードは、彼の大会への期待の大きさを物語っているといえよう。

(30) J. Joll, ibid., p.165, 平瀬、前掲論文、三三頁。

(31) G. Haupt, ibid., pp.116-117

第二章　開戦直前の社会主義者たち

(1)　ドイツとフランスの社会主義政党

パリ大会は、にわかにひろがった戦火によって、無期延期を余儀なくされた。B・S・Iは、この大会の準備をすでに完了しており、報告案も用意されていた。[1] このお膳立てにしたがって行なわれる筈であったパリ大会が国際社会主義運動の発展にどれほど寄与し得たかは、判断のかぎりではないが、ともかく各国の社会主義諸政党は、この大会の無期延期によって共通の戦術をなにひとつ持たずに全く独自の判断によって活動せざるを得ない状態にたちいたったのであった。

前述のようにドイツ各地では、S・P・Dの呼びかけにこたえて戦争反対の集会やデモンストレーションが行なわれていた。大衆運動の規模がひろがりつつある最中に、政府指導層は、その政策についてS・P・Dの支持をとりつけようと努力していた。帝国宰相ヴェートマン・ホルヴェークは、七月二八日に(S・P・D)国会議員ジュデクムを通じて政府の方針を妨害しないことを依頼した。ジュデクムは、S・P・Dの幹部であるF・エーベルト、D・ブラウン、A・ミューラー、F・バルテルスおよび国会議員のR・フィッシャー等と相談したうえで、宰相に手紙をおくり「ゼネストやサボタージュなどの行動は計画してもいないのだから、おそれるには及ばない」と請合った。[2] さらに、幹部会は党機関紙編集部にたいする秘密書簡で、「戦争反対宣伝については、極めて慎重に行なうように」と勧告した。[3] このように協力的な指導者によって組織された平和希求の慎重なデモンストレーションや集会は、政府にとって恐れるに値するものである筈がなかった。事実、ヴェートマン・ホルヴェークは、三〇日のプロシャ閣議で「社会民主主義者やS・P・D幹部については、特に心配する必要はない。ゼネストやサボタージュなど問題にもなっていない」と明言している。[4]

フランスでも大衆行動が組まれていた。『パタイユ・サンディカリスト』紙の呼びかけに応じて、二七日には、パリで三万名が抗議集会に参加した。同紙によれば「戦争宣言は労働者にとって仕事の即時放棄の合図」なのであり、集会に参加した組合のなかには、すぐにもゼネストの準備にとりかかることを要求するものもあった。[5]

C・G・Tは、一九一二年にパリでおこなわれた全国大会で、戦争がはじまったときの全労働者の義務は革命的ゼネストを実施す

ることであるという決議を既に採択していた。[6] しかし、一四年のこのとき、C・G・T幹部は誰ひとりゼネストを本気で組織しようと考えてはいなかった。二八日に開かれたC・G・T執行委員会は、美辞麗句をならべた決議文を作成したにとどまり、ゼネストについては一言も触れなかった。[7] 翌二九日にはC・G・Tのイニシアティヴで大集会が計画されていた。しかし、政府は「演説者が動員を妨げる方法を論ずるよう呼びかけるかも知れぬ」、集会を認めるわけにはいかない、という理由でこれを禁止した。[8] C・G・Tは「政府が採用している平和政策を支持し強化することを目的とする集会であるのに何を恐れて禁止するのか」という趣旨の抗議声明を発表しただけでひきさがってしまったのである。[9]

また、二七日の常任執行委員会決議に従ってフランス社会党の決議を伝達するために政府当局を訪れた社会党議員も党の見解として次のように述べただけであった。

「フランスは、四〇年来、アルザス＝ロレーヌに対する復讐心を、より上位の平和という利益に従属させてきたのであり、政府がセルビア紛争にひきずりこまれることはあり得ないと考える。」[10]

結局、フランス社会党の情勢把握は、政府の見解を踏襲したものにすぎなかったのである。二九日を境として、戦争反対運動は一部地方で散発的に開かれはしたが、もはや全国的規模では推進されなくなった。熱狂的な反愛国主義者であったエルヴェもこの頃から愛国主義者に変身しつつあった。[11]

以上の状況の下で、ドイツとフランスの社会党が戦争反対の共同行動をとる可能性を探る最後のこころみがドイツ側のイニシアティヴによっておこなわれたのである。

B・S・I総会をおえて三〇日に帰国したハーゼがすぐその足でS・P・Dの幹部会に出席した。

この会議では、ロシアが侵略してきたときに、ドイツ社会民主党は決してわが祖国を見捨てないであろう、という趣旨の声明を党機関紙『フォアヴェルツ』に掲載するか否かという問題をめぐって議論がもちあがっていた。この立場をおおやけに鮮明にすることは、党を選出母体とする国会議員団が、戦時公債の提案があった場合に賛成票を投ずることを宣言するようなものであった。

ハーゼと彼の支持者たちは、激しい口調で反対の意志を表明し、一歩もゆずらずにその掲載を思いとどまらせた。

ドイツ政府が、ロシアおよびフランスに最終的な通牒を発した翌三一日には、S・P・Dの幹部会と国会議員団幹部会の合同会議が開かれた。

この会議の席上、ドイツとフランスの両党が、戦時公債にかんして歩調を揃えて、行動する可能性をさぐるために、党幹部会員であるミューラーを、フランス社会党との協議のためにパリにおもむかせることがきめられた。彼は、まずジョレスにあう手筈であった（もっともジョレスは、この日の夕方、暗殺されたから、これは不可能となった）。しかし、ミューラーには、党からも議員団からもはっきりした指示も与えられず、付与された権限の範囲も不明確であった。したがって、その任務の内容は極めて曖昧なものなのであった。

ミューラーは、八月一日にブルュッセルに着き、通訳のアンリ・ド・マンを伴って、ユイスマンスとともにパリにむかった。[12] 翌日、彼らがパリにやってきた時には、フランスはドイツの最後通牒を拒否し、ドイツとロシアの戦争に介入することも辞さないという態度をすでに決定し、その日の夕方に総動員が開始されようとしていた。ミューラーは、フランス社会党のルノーデルとサンバに二度にわたって会った。[13] 彼はまず、自分の任務を相互の情報交換であると告げた。彼は、党執行部も国会議員団も、まだ、戦時公債について最終的に態度を決定したわけではないが、しかし、状況の急激な変化もないとはいえないので、彼がベルリンを発つ時点における党の内部状態を出来るだけ客観的に話すにとどめる、と予めことわった。そして、ドイツの党は、最終的に行動方針を確定する前に、フランスの党と歩調を合わせるため、とりわけ戦時公債についてのフランス社会党の態度を知りたい、と来意を告げた。

「（これは個人的見解にすぎないが）、……S・P・Dは、戦時公債の提案があっても賛成票を投ずることにはならないであろう。党内には、公債に強く反対する立場をとる者と、棄権を考えている者とがいるが、前者のほうが数的には多い。[14]」と彼は語った。

フランスの社会主義者は、紛争当事国のいずれか一つの国から攻撃をうけた場合には、攻撃をうけた国は正当防衛の権利があり、これを実際に行使できる、と考えていた。

「フランス政府は真に平和をのぞんでいる。したがって戦争が勃発した場合には、われわれは、戦時公債の提案にたいして、正面きって反対することは出来ない。われわれは、これに賛成するか、または棄権するか、について選択し得るのみである。そしておそらく棄権するであろう。その理由は、われわれが、これまで絶えず反対してきた軍備競争の結果について、その責任の一端を政府とともに荷なうことをはっきり拒否するため、というに尽きる。[15]」

これに対してミューラーは、攻撃する国と攻撃される国という区別は、もはや時代遅れである、と反論した。

「紛争は、帝国主義的概念によって要約される種々の原因から生ずるのである。したがって、戦争の責任は、全当事国の支配階級にあるのであり、ナショナリスティックな立論は、捨てられなければならない。」[16]

ミューラーが熱心に説得を試みたにもかかわらず、会談は平行線をたどり、結局、戦時公債について、フランスおよびドイツの党が共同の行動をなし得るとすれば、それぞれに自国政府の提案にたいする投票が行なわれるときに棄権する、ということだけであった。ミューラーには、フランスの党との間で何らかのとりきめをする権限が明確に与えられていなかったために、この会談では、「プロレタリアートの国際統一をできるだけまもりつづけるよう努力はするが、最終的決定については、両党の完全な自主性にゆだねる。」[17]ということが確認されたにすぎなかった。

このように、八月一日には、フランスの社会主義者も、ドイツの社会主義者も、もはや労働者大衆に、戦争にも、動員にも、反対するようによびかけようとはしなくなっていたのであった。

八月一日、午後三時五十五分にフランスでは、総動員令が発せられた。そして、ドイツでは同日の午後四時にやはり総動員令が出され、午後七時にロシアに対する宣戦が布告された。

八月四日に帝国議会が召集されたために、ドイツの党は、いよいよ戦時公債について最終的に態度を決定しなければならないことになり、二日にS・P・D幹部会と、党の国会議員団との合同会議が開かれるはこびとなった。[18]

この会議でも、前回と同様に、ハーゼとレーデブールが反対投票を主張した。しかし、他の出席者の多くが賛成投票をすべきであるとゆずらなかったために、議論が紛糾した。[19]結局、この会議では、結論は出されず、翌三日朝から党選出議員団の総会が開かれることになった。ところが、この日、ハーゼとシャイデマンが帝国宰相ヴェートマン・ホルヴェークから緊急の呼び出しをうけた。[20]それで総会は、この二名の議員が帰ってくるまで開会を延期した。

ハーゼとシャイデマンが出かけてみると、他の政党の代表も集まっており、そこで首相は、翌日の帝国議会で行なうことになっている演説の草稿を読みきかせたのであった。その演説によれば、戦時公債の提案は、全員一致で、賛成されることになっていた。彼等はS・P・Dはまだ党としての態度を決定していない旨を首相

に告げ、党議員団の総会に出席するためにひきかえした。[21]

午後から開かれた総会では、議員の多数がいまや現実化したロシアの侵略の恐ろしさを強調し、社会民主党は祖国を見放すこともできないし、野蛮なコサックの群に祖国をふみにじられるままにすることも出来ない、と論じた。[22] この討論の最中に、ミューラーがパリから戻ってきた。彼は、フランス社会党が公債に反対投票する態度をきめてはいない、と報告したのであった。多数派は力を得た。彼等は、首相は戦争回避のために、あらゆる努力を尽した、だから公債に賛成票を投ずることは、自国の防衛に役立つこととして許されると主張した。これにたいして、ハーゼ、レーデブール、リープクネヒトも、賛成投票は、社会主義にたいする裏切りである、とゆずらなかった。しかし、票決の結果、彼等は敗れた。賛成投票派は七八名、反対は、わずか一四名であった。結局、翌八月四日には、S・P・Dとしては全員一致で公債の提案に賛成投票をすることがきめられたのであった。[23]

ハーゼは議員団長を辞任しようとしたが、これは受け入れられず、[24] 四日の議会では党声明を読まされる破目になったのであった。ハーゼが読みあげた党の声明は次のようなものであった。

「……われわれは、敵の侵略に脅やかされている。われわれは、いま、戦争に反対したりまたは賛成したり、というそれぞれの立場によって、この戦時公債にたいして投票すべきではない。というのは、いまや、祖国をまもるのに必要な方策を提示する、という問題を、一致して解決しなければならないからである。」[26]

この声明をきっかけとして、ドイツの党は、戦争にのめりこんで行ったのであった。[26]

ところで、フランス社会党は、自国の戦時公債にたいしてどのように対処したのであろうか。

フランスの党は、八月一日のミューラーとの会談で、祖国防衛の戦争には協力することをはっきり言明していた。しかし、ヴァイヤン、ロンゲ、カシャン、サンバ等フランス社会党の指導者は二日にドイツがベルギーに通過許可を求める最後通牒を送った後もなお、平和への望みを捨てはしなかった。ドイツとフランスの交渉が決裂した八月三日、フランス社会党の国会議員団は、首相を訪問した。首相ヴィヴィアンニは、平和の可能性はきわめてすくないが、フランス側では和平交渉の再開を妨げるようなことは一切しないこと、だから、フランスは、その軍隊を国境から六マイルも離しているのだということ、について語った。そして彼は、ドイツ大使がパリに駐在している間は、交渉の再開はいつでも可能

であることをも告げた。社会党議員団は、これにたいして、フランス政府が平和のための努力を続けることを望むと述べ、仲介を要請するアピールをイギリス政府に送ることを首相に要求した。[27]

しかし、この会談終了後、一時間もすぎないうちにドイツの宣戦布告がなされたのであった。このドイツの最後通牒が、わずかに保たれていた平和へののぞみの糸を断ち切ったのだとフランス社会主義者は考えたのである。

八月四日に、フランス社会党議員団も、全員一致で戦時公債の提案に賛成票を投じた。彼らの理由は全く簡単であった。「フランス政府はずっと平和を望んでいた。フランス政府も、ドイツの帝国主義的侵略の犠牲者なのであるから、われわれは一致してフランスを守らなければならない。[28]」というのがそれであった。

フランス政府は、あらたに国家防衛大臣を創設した。八月二三日にフランスの党は、サンバとゲードの二名を入閣させることを承認した。この内閣には、社会党を脱党したミルランとブリアンがすでに閣僚として名をつらねており、フランスの党は彼らをかねがね攻撃していたのであった。この点について、ヴァイヤンは、「われわれは、彼らの行動にたいしては、現在と将来についてのみ判断しなければならないのだ。この重大な時にあたってわれわれは、国家全体の利益を基準にして行動しなければならないのであり、いま、彼らの過去の行動をとやかく論評することは避けなければならないのだ。[29]」と説明している。

こうして、フランス社会党も、積極的に政府の戦争政策に協力することになって行ったのである。

(1) 大会は、全部で五つの委員会に分れており、それぞれ報告者が予め決められていた。それは次のとおりである。カッコ内は、報告者。第一委員会—失業（E・ヴァイヤン、H・モルケンブール、ベルギー労働党）第二委員会—物価騰貴（O・バウアー、S・ウェッブ、I・B・ジェスト）第三委員会—帝国主義と仲裁裁判所（H・ハーゼ、W・H・フリーギン）第四委員会—アルコール中毒（E・ヴァンデルヴェルデ、E・ヴルム）第五委員会—ロシアにおける政治犯の状況（K・リープクネヒト）

(2) Dokumente und Materialien zur Geschichte der deutschen Arbeitbewegung, 1958, Bd. I, S.17-18

(3) A. Reisberg, Lenin und die Zimmerwalder Bewegung 1966, S.62

(4) K. Kautsky, Die deutschen Dokumente zum Kriegausbruch, Bd. I, 1922, S.178

(5) Grünberg, a. a. O., S.134,136

資料

(6) A. Kriegel, Partie ou Revolution. Le mouvement ouvrier français devant la guerre. 《Revue d'histoire economique et social.》 43, 1963, No.3, p.369-370

(7) Grünberg, a. a. O., S.143

(8) この集会の呼びかけのなかに「中心的諸組織が、一二年の大会決議を遵守せよと既に要求を出しているのに、戦争防止のためにC・G・Tが手をこまねいていてよいのか」という部分があった。Grünberg, a. a. O., S.144 そこで政府は、予め手をうつ必要があると判断したのであろう。

(9) Grünberg, a. a. O., S.144 約二〇名ほどの若者が集会を強行したが、警察によって、たちまち解散させられた。
A. Kriegel., op cit., p.55

(10) Grünberg., a. a. O., S.141-142

(11) a. a. O., S.139-141 横山信「フランス外交史序説」一九六三年、一七三頁。

(12) アンリ・ド・マンの報告 Grünberg., a. a. O., S.40-42

(13) M. Fainsod, International Socialism and the World War, 1935, p.27 Grünberg., a. a. O., S.41

(14) Grünberg., a. a. O., S.41

(15) ibid.

(16) M. Fainsod, ibid., p.27

(17) J. Joll, ibid., p.173

(18) ibid. p.174

(19) ibid., p.174 M. Fainsod, ibid., p.28

(20) M. Fainsod, ibid., p.29

(21) J. Joll, ibid., p.175

(22) ドイツ社会民主党がロシアをどのようなイメージでとらえており、そして、その政策にどのような影響を与えたかについては、次の論文を参照。
William Mael, The role of russia in German socialist policy, 1914-18, 《International Review of Social History》 vol. Ⅳ, 1959, pp. 177-198

(23) M. Fainsaot, ibid., p.29

(24) A. W. Humphrey, ibid ., p.46

(25) 全文は Grünberg, a. a. O., S.76-77 に収録されている。

(26) S・P・Dの『八月四日の政策』について、A・ローゼンベルクは、「八月四日における社会民主党の国会議員の態度を決定せしめたものは、なによりもまず、社会民主党の労働者、大衆の気分であって、かれらはロシアのツァーの軍隊がドイツにおそいかかることに耐えられなかったのだ」と述べ、賛成投票自体はやむをえなかったし、マルクス主義の教義とも一致するものであったが、域内平和政策は、社会主義者のとるべき態度ではなかった、と論じている。アルトゥール・ローゼンベルク、足利末男訳「ワイマール共和国成立史一八七一―一九一八」一九六九年、七三頁以下。

(27) A. W. Humphrey, ibid., p.80

(28) Jules Hambert Droz, L'origine de l'internationale communiste, de Zimmerwald a moscou, 1968, p. 51
フランス国民議会は、討議をせず、満場一致で戦時公債を採択している。

(29) A. W. Humphrey, ibid., p.81